

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-134	15-116	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Gender Differences in the Effect of Depressive Symptoms on Prospective Alcohol Expectancies, Coping Motives, and Alcohol Outcomes in the First Year of College. 大学 1 年次におけるアルコール効果への期待、対処性動機、飲酒の実態に及ぼす鬱症状の影響の性差		
執筆者		
Kenney S, Jones RN, Barnett NP.		
掲載誌		
J Youth Adolesc. 2015 Oct;44(10):1884-97. doi: 10.1007/s10964-015-0311-3.		
キーワード		PMID
うつ症状、対処性動機、大学生、飲酒、性差		
要 旨		
<p>背景： 問題飲酒とアルコール依存症リスクは青年期の終盤、特に大学 1 年次あたりにピークを迎える。鬱症状を持ちながら大学に入学した学生は、飲酒関連の問題事象が起こる危険性が高い傾向があるが、危険性に介在するメカニズムに関する研究はほとんど行われていない。</p> <p>方法： 3 つの大学の新生からランダムに選ばれた 2,821 名に郵送で研究の案内を行い、1,053 名から参加の同意が得られた。入学前と 1 年次の終了時の両方にオンラインでの回答が得られ、対象者基準を満たした 614 名（女性 59%、非白人 33%）を解析対象とした。鬱症状、アルコール効果への期待、飲酒の動機、飲酒により生じた問題事象の評価には、各々 CES-D、B-CEOA、DMQ、YAAPST を用いた。飲酒関連の問題事象の予測因子としての、入学時の鬱症状を評価するためパス解析を行った。</p> <p>結果： 対象者のうち男性で 18%、女性で 20%に鬱症状 (CES-D=>16) を認め、女性は男性よりも入学前と 1 年次の両期間とも飲酒量が少なかった (共に P<0.01)。女性において、鬱症状は飲酒関連の問題事象の予測因子であり(二変量回帰：β=0.13、P=0.01)、1 年次の終わりの時点での対処性動機が飲酒関連の問題事象と関連していた(β=0.23、P<0.001)。男性の鬱症状は、人種/民族、入学前の時点でのアルコール効果への期待、飲酒の動機、飲酒の量/頻度といった要因から独立して、飲酒関連の問題事象の予測因子であった(β=0.14、P<0.001)。また社会性動機が飲酒関連の問題事象と関連していた(β=0.14、P=0.01)。</p> <p>結論： 鬱症状を有する青年期女性に対して、様々な問題への対処方法や飲酒の動機について関わりを持つことは意義があると考えられる。青年期男性に関しても、鬱症状と飲酒の実態に介在する要因についてさらなる研究が望まれる。</p>		